

- ・何事も、自分で行動を起こさないとダメなのに、子どもがいたら動けない。行動に移せるまで、保健師等が寄り添ってくれたらいいのに、高齢や児童のことでいっぱい、手が回らない。
- ・家がなくなって大変なこともあったが、復興支援の製品制作を通して全国の人と知り合いになれたことが良かった。
- ・1Kに5人で住んでいた時、知的障害のある子どもはトイレに閉じこもっていた。その後1軒屋を借りたが、子どもがブツブツ言いながら歩くので、近所の人から、外に出すなど苦情が来た。その時は、さすがに辛かった。
- ・助成金を、広域での活動にも使えるようにしてほしい。被災者限定だと、利用者が限られて経営が成り立たない。
- ・身体障害者と知的障害者で、周囲の対応が違いすぎる。職員の人数も違いがある。知的障害はもっと手厚くしたほうがいい。
- ・子どものことを言われると、自分のことを言われるよりも辛く感じる親は多い。
- ・親としては、つい子どもに制限をかける方向でかかわってしまう（独り言を言っていると「シー」、窓を開けると「(丸見えになるので)閉めなさい」)。
- ・仮設では、周りに犬を飼っている人が多かったため、我が子のうるささは目立たなかった。
- ・この町の障害者は、ここへ避難してということを決めておいてもらえれば、必要なものを届けてもらえるのに。
- ・趣味(手芸)に没頭できる時間ができた。作ったものを出品して評価してもらえるのが嬉しい。「〇〇ちゃんのパパ」で

はなく、「自分」でいられる時間が大切。

#### <考察>

防災に関するハンドブックは多数出されているものの、「被災するということ」についての、親向け・本人向けの事前教育の教材はほとんどないのが現状である。被災したときにどのような観点から生活再建に取り組んだらよいか、どのような資源を使い又は要望していったら良いのかを考える際の指針になるような教材が必要であることが分かった。

同時に、個人のタイプアセスメントと、親子関係調整およびストレスマネジメントの方法を盛り込み、レジリエンスを高められるようにするような家族支援プログラムを、平素から実施していくことも重要であると考えられる。

生活再建の過程においては、親の会だからこそ届けられる支援物資の供給ネットワーク作りができることが望ましい。

#### ③H26年度グループヒアリングから

対象：宮城県A市の育成会会員5名。いずれも母親の立場。

時期：2014年11月

方法：グループヒアリング。

調査項目：災害時から今までを通して、障害のある人と家族の状況、障害のある人の力を発見するための工夫について。

#### <結果>

- ・障害のある子どもがいるために、身動きが取れない時の支援が必要（買い出し・水汲み）
- ・精神障害のある人が、自閉症の子どもが走っているのを見て「うるさい」と怒鳴っていた。福祉避難所内であっても、

棲み分けは必要になるのではないか。

・緊急時は、その地域や場所で何とかするしかない。親の会同士で援助しあえるとしたら、被災から1週間後くらいに、我が子が落ち着いていられるようなグッズがあれば助かると思う。（「これがあれば落ち着けるグッズ」調査：2014年1～3月実施を踏まえて。この調査では、多様性・個別性の高さが明確になった）

・子どもの安否確認の面では、学校や施設にいてくれた方が有難い。

・物資配給の際に、「この人には3人分あげて下さい」という証明書を発行していた市があった。

・重度の知的障害がある人も、1人〇個の配給をもらう際に役に立つし、車いすだと荷物が積める、というふうに思うことも大切ではないか。

#### <考察>

障害者の持てる力を発揮できるようにする方策を具体化するために、活躍の場や役に立つことを探す視点が必要であることが分かった。また、身動きできない時の支援や配給時の支援など、被災時の家族の負担を軽減するための方策を周知することも必要である。

## （2）知的障害者の置かれている状況

### ①H24 年度試験的グループワーク、個別ヒアリングから

#### ●試験的グループワーク

##### <第1回>

対象：福島県から原発による避難をしている知的障害者入所施設の利用者6名および支援者3名。

時期：2012年11月

内容：ワークショップ形式で実施。『サイコロで話そう』ワークとして、「帰る」「逃げる」「暮らす」「仲間」「知る・聞く」「備える」をサイコロの面に記し、各自が振って出た目に応じた質問に答えていく。

##### <第2回>

対象：東日本大震災で被災した知的障害者で、全日本手をつなぐ育成会主催『知的障害のある本人による 障害を知る・可能性を見るプログラム』ファシリテーター養成講座の参加者。岩手県6名、宮城県6名、福島県9名、茨城県1名、計22名。

時期：2013年2月

内容：ワークショップ形式で実施。『出会いを語る』ワークとして、震災が起こる前と後で、どのような出会いがあったかを話し合う。ワークの目的と方法について説明を受けたあとに、各自でワークシートに書き込む。具体的には、【震災が起こる前】大切だった物・大切だった人・うれしかったこと・悲しかったこと。【震災が起きた後～いま】大切な物・大切な人・うれしかったこと・悲しかったこと。記入後、グループ（参加者同士）で話し合う。発表できる人は、感想を発表する。倫理面の配慮：この質問を聞いても大丈夫かどうか、発表しても大丈夫かどうかを何度も確認しながら行った。

##### <考察>

軽度の知的障害のある人には、文字で表現して話し合うという方法も有効であることが分かった。各グループの話し合いはとても活発で、充実した話し合いができた様子であった。一方で、中重度の

知的障害のある人向けバージョンとして、絵カードや写真から選んで貼るという方法を開発する必要性と、質問の最後の項目が「悲しかったこと」になっていたために、様々な出来事を思い出して悲しい気分になったところでワークが終了となってしまった。質問項目の順番を再考する必要性が明らかになった。

知的障害者は、自身の障害が分からない場合が多いと言われている。第2回の試験的グループワークプログラムを実施した際に、別な質問で「知的障害は治るか」と問いかけたところ、「分からない」が一番多い回答であったが、「治らない」よりも「治る」に手を挙げた者が多かった。理由を聞くと、「てんかん」と誤解している場合が多かった（例：薬を飲んでいけば治る）。自身の障害の把握は、適切な支援を求める力につながることから、知的障害者向け生活再建支援プログラムでは、障害に関する項目も取り入れた方が良いと考えられた。また、単発ではなくいくつかのワークの一部として実施したほうがよいこと、その際には自己肯定感を高めるワークも取り入れるなど、ワークショップ全体の流れも含めて開発していくことが必要であることが分かった。

#### ●個別ヒアリング

**対象：**本人活動（障害者によるセルフアドボカシー活動）をしている人で、育成会にかかわりのある人、1名。

**時期：**2013年3月

**手続き：**全日本手をつなぐ育成会の仲介で、支援者または本人に連絡を取り、本人の許可が得られた場合に実施した。ヒアリングの目的、記録方法（許可が得ら

れた場合には録音）、調査内容の使用目的、使用の際の本人確認の方法について説明を行い、同意を得てからヒアリングに入った。

**ヒアリング項目：**属性、成育歴・職歴、震災前の暮らし（家族・友人および本人会、職場、支援者、近隣などとの関係）、避難していた時に体験したこと（大変なこと、良かったこと）、仮設住宅などに移った後の生活変化（困っている事、大切にしているもの、必要な支援）、今の暮らしの状況（満足度）、これからのこと（夢、やりたいこと）、障害理解の状態。

#### <考察>

ヒアリング項目に、震災前と今を比較評価するものを加えた方が良いことが分かった。質問の理解及び回答を補う工夫が必要であることが分かった。

#### ②H25年度個別ヒアリングから

**対象：**発災時に、岩手県A市・B市・C町、宮城県D市・E市・F町、福島県G市・H町・I町、茨城県J市に居住し、震災による被害（事業所の閉鎖・自宅損壊・地域移動・避難）を体験した知的障害のある人。および、上記の被害を受けた人を受け入れた地域で、知的障害者の本人活動をしている人。

**時期：**2013年4月～8月

**手続き：**a)全日本手をつなぐ育成会の下部組織である県手をつなぐ育成会に依頼をし、事業所および利用者もしくは市町育成会の会員の紹介を受けた。b)全日本手をつなぐ育成会と、全国大会等を通して関係作りができていない事業所に依頼し利用者の紹介を受けた。c)全日本手をつ

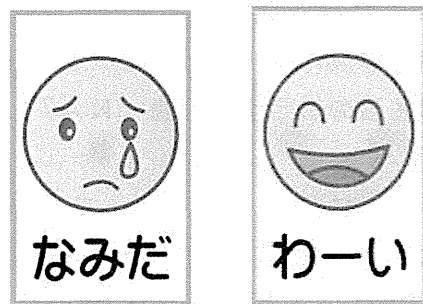
なぐ育成会と、全国大会等を通して関係作りができていた本人に直接連絡をし、了承を得た。

**ヒアリング項目：**属性、成育歴・職歴、震災前の暮らし（家族・友人および本人会、職場、支援者、近隣などとの関係）、避難していた時に体験したこと（大変なこと、良かったこと）、仮設住宅などに移った後の生活変化（困っている事、大切にしているもの、必要な支援）、今の暮らしの状況（満足度）、これからのこと（夢、やりたいこと）、障害理解の状態、現状の点数（震災前を100点として）。

**ヒアリング方法：**調査者2名または3名（3名のうち1名は知的障害者）でチームを作り、ピアサポートの観点を取り入れつつヒアリングを行った。本人の希望に応じ、支援者が同席することもあった。気持ちを適切な言葉で言い表せない場合を想定して、多様な表情および感情を表す言葉を印刷したシートを用意し、必要に応じてそれを用いて会話をした。重度の知的障害のある人に対する調査方法を探るため、絵カードや写真を用意した。



出典：全日本手をつなぐ育成会(2013)「自分の障害を知る・可能性を見る みんなで知る見るワークショップ」付属資料



### <結果>

#### ○属性

性別：男性16名、女性15名。計31名。

年代：10代1名（1.2%）、20代13名（41.9%）、30代7名（22.6%）、40代5名（16.1%）、50代4名（12.9%）、60代1名（3.2%）。平均年齢34.8歳。

障害種別：知的障害30名、精神障害1名（自称）。うち、身体障害3名（重複）。

障害程度：軽度22名（71.0%）、中度4名（12.9%）、重度5名（16.1%。うち、ジェスチャーを含めた言語交流が不可だった者：1名）

家族：なし2名、有り（別居）8名、有り（同居）21名。

震災による家族の変化：家族の死亡有り4名、なし27名。

震災後に親と同居：2名。

被災による仕事（職場）の変更：有り14名、なし16名、不明1名。

居住地の移動：有り4名、なし26名、不明1名。

居住形態の変更：有り18名、なし12名、不明1名。

\*有りの場合、現在の形態：下宿1、仮設住宅11、借り上げ住宅1、借家2、実家再建1、GH2。

避難での地域移動：有り11名、なし19名、不明1名。

被災による精神症状等：家族死亡の場合・自身が津波に遭った場合に「有り」。

○現在の生活の満足度と理由 NA7

100点台：4名

・理由はとくになし。「がんばって『絆』を深めよう」(地域移動なし(遠距離避難あり)/仕事変更なし/居住形態変更なし)

・家が落ち着いた。好きなDVDが見られる。(地域移動なし/仕事変更有り/居住形態変更なし：実家)

・母と二人暮らしから震災前に移ったGHが(慣れなかったので)60点、仮設住宅での一人暮らし25点、妹宅での避難生活10点。(地域移動なし/仕事変更なし/居住形態変更有り：GH)

・特になし。(地域移動なし/仕事変更有り/居住形態変更有り：仮設)

90点台：5名

・うれしいことは「お昼にみんなと食べるお弁当の時間」みんなでいろいろ食べたり話したりお昼寝したりできる。(地域移動なし/仕事変更なし/居住形態変更有り：実家再建)

・グループホームの世話人との関係が悪いことがマイナス5点。(地域移動なし(遠距離避難あり)/仕事変更なし/居住形態変更なし)

・仮設住宅の部屋が狭い。(地域移動有り/仕事変更有り/居住形態変更有り：仮設)

・以前と同じところに復職でき、ジョギングや好きな床屋に行き、好きなハンバーガー屋に(母と)行けるから。(地域移動なし/仕事変更有り/居住形態変更有り：仮設)

・今の暮らしは普通。仕事は好き。趣味のマラソンができる。(地域移動なし/仕

事変更なし/居住形態変更なし：入所施設)  
80点台：3名

・たまにいろいろと考えてしまうところがあるから。(地域移動なし/仕事変更なし/居住形態変更なし：GH)

・職場で自分の思いを言えない。亡くなった友人がいるので。(地域移動なし/仕事変更なし/居住形態変更なし：実家)

・親に心配をかけているので(マイナス10点)。夢を現実にできていないから(マイナス10点)(地域移動なし/仕事変更なし/居住形態変更なし：実家)

かなりいいね」：病院へ行ける(透析のため)。今利用している通所施設ではひどいことをされない。休憩時間にやるゲームが楽しい。(地域移動なし/仕事変更なし/居住形態変更有り：仮設)

70点台：2名

・テレビで震災前に住んでいた土地の名前を見ると、ショックを受けるから。見るとムカつく。戻れないし。バリアード通れないし。桜も見られないから。今の町長が悪い。町長と話し合いがあって参加したときに、他の参加者が町長に怒鳴っているのが怖くて涙が出た。(地域移動有り/仕事変更有り/居住形態変更有り：下宿)

・GHから買い物に行くのに店が遠い。近所付き合いが難しい(GHは障害者の集まりだから)。職場と近隣から差別されたことがある。かつての同僚がもとの会社で働けるようになり、自分は転職したので、ちょっと悔しい。(地域移動なし/仕事変更有り/居住形態変更なし：GH)

50点台：6名

・仮設住宅の湿気。夏に小虫が飛んでく

る。結露で水がたれる。現在受けている支援はとてもよい。(地域移動なし/仕事変更有り/居住形態変更有り：仮設)

・一緒に住んでいるグループホームのメンバーと気が合わない。グループホームの担当職員が男性に変わってしまい、相談できなくなってしまったから。(地域移動なし(遠距離避難あり)/仕事変更なし/居住形態変更なし)

・給料を上げてほしい、休みがもう少し欲しい、市内の山の方に引っ越したい、結婚したい。(地域移動なし/仕事変更なし/居住形態変更なし：独居)

・早起きが辛い。田んぼで米を作れるのが支えだが、もう少し家から近ければいい。人間関係が苦手。家がもう少し広いといい。(地域移動なし/仕事変更有り/居住形態変更有り：借り上げ住宅)

・(震災後に同居を始めた)お母さんの怒り方が苦手。畑仕事が苦手。(地域移動有り/仕事変更有り/居住形態変更有り：仮設)

・母と二人暮らしなので、できる範囲のことは手伝ってあげたい。洗いものなどをしているが、これから手伝えるところを増やしていきたい。(地域移動なし/仕事変更有り/居住形態変更有り：仮設)

その他：1名

・点数は付けられない。理由はノーコメント。(地域移動なし/仕事変更有り/居住形態変更有り：借家・親と同居開始)

#### <考察>

全体的に、支援者及び/又は家族とのかかわりがある人だったせいか、主観的な困難さは低い傾向にあった。ただし、NAの中に、震災後精神症状が出た者が2名

いた。精神症状が出ていても90点台と答えた者は1名だった。

自身の「障害」について説明できた人はおらず、知的障害が軽度の人でも、重度の人と同様の「受け身」の生活をした人が多かった。このことは、家族・支援者が抱える困難性と関連があると考えられる。つまり、知的障害者自身が個々人の能力を生かしながら支援を適切に使うことができないでいることによって、家族・支援者の負担が過剰になりやすいということである。

被災時や生活再建の過程で、知的障害児者の普段とは違う一面(こだわりを出さなかった、自分で切り替えられた、大人になった等)を見たというエピソードも少数ながら存在している。エンパワメント・災害時マンパワーの観点から考えても、中軽度の知的障害者の「発揮する力」の活用について、家族・本人教育を平素から行っていく必要がある。

#### ③H26 年度個別ヒアリング、試験的グループワークから

対象・方法：原発による避難をしている社会福祉法人を利用している知的障害者に対し、ヒアリングおよびグループワークによって、生活再建支援策の検討を行った。同法人利用者を対象とした試験的グループワークをH24年に実施した際、言語操作が苦手なタイプの人でも参加できるプログラムの必要性が分かったことから、今回は絵カードと写真を多く取り入れた。ヒアリング対象者3名(男性1、女性2)、グループワーク参加者31名(男性13、女性18)。障害程度は軽度から重

度。

時期：2014年11月

倫理面の配慮：趣旨を分かりやすく説明すると共に、知的障害者にはピアアドボケイター（知的障害者同士で権利擁護をする人）及び支援者が同席した。

内容：ヒアリング内容は、2013年での調査に準じた。グループワークでは、当該法人が平成28年に入所施設機能を維持したまま福島県に帰還する予定であることを踏まえて、A「誰と住みたいか（写真から選ぶ）」、B「何が必要か（家のタイプ・家財道具等をカードから選ぶ）」、C「必要な物の中から1つだけ選ぶとしたら」の3つの質問に沿って、写真またはカードを選んでホワイトボードに貼り、参加者全員で共有する形を取った。当初は全員に回答してもらおう予定であったが、一人一人に時間を要したため、終了時間の制約から回答者は17名となった。

#### <結果と考察>

ヒアリング調査では、現状や将来の夢を語るなかで、自分の可能性や持てる力を発揮したいという意欲が把握できた。

グループワークでは、個々人にとって重要な物・人は何か、どういう気持ちになるかということが把握できた。絵カードでは分かりにくい人もいたため、今後は写真の活用が必要になる。普段はなかなか気持ちを話せない人が、「ここ（避難先）」を表すのに「涙顔」を、「新しい家（転居先）」に対して「ニコニコ顔」を選んでいたことが、印象的であった。

### （3）課題抽出

#### ①親の生活の面から

#### <避難時の障害種別による困難さ>

現在、各地で災害時要援護者用の福祉避難所の設置が行われている。障害への特別な配慮を集中することができ、気兼ねなく使うことができるため、メリットのある方法だと考えられる。

しかし、例えば自閉性障害がある人が20人・30人と集まった場合に、その避難所が彼らにとって落ち着ける場所になるのだろうか。また、体重が100キロ近い知的障害のある人をトイレに連れて行くのに、男性5人が移動を手伝っていたという話も耳にした。このような場合、災害時要援護者と支援者だけの避難所で十分な人手を確保することができるのかは疑問である。

特別なニーズを有し手助けが必要であるということと、どのような場でそれに対応するかということについては、今後さらに検討を重ねていく必要がある。

#### <生活課題と生活再建>

災害時は、まず家族・親族ネットワークが優先されるが、それだけだと親子関係の密着化とストレスの高まりを生む。成人した子どもは、親から独立して自分らしい暮らしをめざすべきという障害者福祉の方向性と矛盾した事態が生じてしまう。

一方で、震災を機に、我が子が人助けをしているのを見て、大人になったのだなあと感じたという親や、知的障害のある子どもが避難所で人気者になって周りから感謝されたという例からは、本人の存在意義や価値を発見する機会でもあったことが分かる。

これらのことから、災害からの生活再

建を考える際には、緊急時のニーズ（衣食住の確保、日中活動の確保など）と、普段の暮らしの中で有しているニーズ（例えば親離れ・子離れ）とを総合的にとらえ、個人や家庭がどの段階のニーズを持っているのかをアセスメントしサービスにつなげていく仕組みが求められていると言えよう。

### <エンパワメント方法>

ヒアリング調査においては、「子どものことを言われると自分のことを言われるよりも辛く感じる親は多い」「子どもがいると動きたいときに思うように動けない」「周囲の目を気にしないでいられる場所が欲しい」といったことが語られていた。このことから、親自身もまた「障害がある」ということをめぐって、傷ついていることが分かる。そのような負担感（ストレス）は平素から存在しており、被災時にはそれがさらに大きくなるものと想像される。

親にとっても、自分が自分らしくいられる場所・自分の価値を感じられる場所が必要とされており、それを見つけ出すためには、障害のとらえ方や親子関係を振り返り整理するための支援が必要となる。

## ②知的障害者の生活の面から

### <障害認識の問題>

今回の調査対象のうち、自身の障害および知的障害とはどういう障害かという問いに対し説明できた人は皆無であった。このことは、さまざまな面で重要な問題を含んでいる。

一つ目は、知的障害者自身のアイデン

ティティの問題である。障害は自身の一部であり、それと向き合わずにいるということは、アイデンティティが不明確になっていることに他ならない。現在、障害者の意思決定や合理的配慮の提供が法的にも重視されてきているが、自身の障害が何なのかが分からない人が、そこに積極的に関与することは難しいであろう。つまり、当事者主体が求められる場においても、客体（受け身）のままになってしまうということである。

二つ目は、周囲の負担の問題である。今回の調査では、軽度の知的障害の人であっても、重度の人と同様の守られ方をしている場合が多かった。すなわち、自分から何かを開拓・解決するのではなく、誰かが何かをしてくれるのを受け入れて、困難が改善されているのである。適切な支援が行き届くことは大切なことであるが、求められるものは当事者としての積極性ではなかろうか。それが無い故に、支援者や家族は、重度の障害のある人がいる場合と同様の世話を提供しなければならなくなり、負担感が増すことになるのである。

このような、知的障害者の障害認識（＝障害とは何か、ということ認識する）の問題についての取り組みは、学齢期から始め、青年期以降も継続することが望ましい。なぜなら、その人が出会う「障害」は、どのような環境・ライフステージにいるかによって異なってくるからである。障害認識についての先駆的な取り組みとして、スウェーデンの FUB（元：知的障害者親の会。現在は親と本人の会）での実践がある。FUBの付属研究所 ALA



は様々な冊子を発行し、知的障害者や家族・支援者の障害認識についての啓発を行っている。その中の一部に、障害認識の重要性を示す次のような文言がある（要約抜粋。表記を一部変更）。「知的障害を持っている人の場合、その人が心に描く自我像は、自分が他の人と異なる扱いを受けているという意識によって影響を受ける。自分はなぜ他の人とは違うのか、そして、どのように違うのかを全く知ることができなければ、その人は自分が価値のない人間であると確信する、言い換えれば、自己信頼を欠くことになる。自己評価が低い場合には、自己知識も乏しくなることはよくあることであり、その場合、自分から何か新しい試みをする気はなくなる。自己評価と自己知識は合せて自己認識と呼ばれる。」「1960年代後半までは、知的障害者は自分の障害を理解できないという考え方がごく一般的だった。本人の前で知的障害という言葉を使うのは無神経なことであり、障害についての知識を持たないようにするのが思いやりであると考えられていた。その結果、知的障害者は大きな子どもとして扱われた。」（『知的障害を持つ人の自己決定を支える』大揚社 P51,P34-35）

今の日本の現状に照らして考えると、障害者の参画を目指した社会を作るためには、周囲の障害認識、本人の障害認識にアプローチすることが重要だということが分かる。

#### ＜エンパワメント方法＞

生活再建の過程において、知的障害者の思わぬ一面を発見し、その持てる力に驚いた・見直したというエピソードは、

まだまだ「子ども」だと思っていた人に「大人」の顔を見たということにも通じるものがある。

知的障害者の側から周囲の自分の扱い方に NO を言うことは難しく、さまざまな気持ちが行動上の問題として表現されることも少なくない。生活再建時には特に、当事者抜きで物事が決められてしまいやすい状況であると言える。

災害時マンパワーの観点からも、知的障害者自身が適切に自己表現でき、積極的に持てる力を発揮できるようにするための支援が必要であり、普段からの取り組みの積み重ねと必要とされる補助具（表現を助ける絵カードやグッズ等）の早期の提供が重要となろう。

#### （４）量的調査による裏付け

##### ①目的・対象・方法

レジリエンスが強いタイプ・弱いタイプの特徴、ストレス要因、震災後に支援内容が変化する層の特徴を検討する。

岩手県・宮城県・福島県の被災地域の手をつなぐ育成会会員、福島県沿岸部の特別支援学校児童生徒の保護者を対象とし、郵送法により実施した。

##### ②倫理面の配慮

調査の依頼文書にて、プライバシーの保護及び量的にのみ使用する旨を明記した。

##### ③調査の概要

アンケート配布数：994件（岩手県：314、宮城県：525、福島県：155）

調査期間：平成26年11月1日～11月15日（15日間）

回収数・率：325件（32.7%）

質問項目：回答者の属性、現在と震災前の同居人数、震災前と今の住まい、震災前の住まいの被災状況、震災後経験した避難、転居回数、今の住居でのめど、震災前と今の相談相手、障害のある子どもとの関わり方、現在の満足度、活動量の変化、ストレス尺度、レジリエンス尺度、パニックになる等の行動をした人の人数・時期、震災後に困ったこと・時期・ほしかったサービス、子ども(障害児者)の属性、障害種別・程度、震災前といまの親との同別居、状態変化(手のかかる症状の発生)、コミュニケーション方法、震災前後のサービス利用状況、等全 25 項目。

#### ④結果(単純集計)

回答者：20代 0.3%、30代 5.7%、40代 19.9%、50代 27.1%、60代 26.2%、70代以上 20.8%であり、男性が 15.4%、女性が 84.6%であった。

震災前の住まい：全壊 7.2%、大規模半壊 9.3%、半壊 12.1%、一部損壊 32.1%、被害なし 38.3%となっていた。

震災前の住まいの形態：持家(戸建)が 77.8%、持家(集合)が 5.5%、賃貸が 10.4%、社宅等 1.5%、公的賃貸 3.7%、その他 0.9%

現在の住まいの形態：仮設住宅 7.0%、賃貸住宅 6.3%、借り上げ・雇用促進住宅 4.3%、再建自宅 6.3%、震災前自宅 69.8%、その他 6.3%

震災後経験したもの：避難なし 48.3%、自主避難 23.1%、避難所 20.6%

この3年間での転居回数：0回 69.6%が中心

現在の住まい：震災前自宅 69.8%が中心、

他は均等

今の住居での目途：立っている 65.3%、立っていない 12.8%(あまり 7.6%+全く 5.2%)

震災前相談相手：いた 94.7%

(複数回答)：家族 72.3%、友人 47.4%、親戚 41.8%、親の会 29.8%、福祉職員 28.3%

現在相談相手：いる/92.6%

(複数回答)：家族 71.7%、友人 47.7%、親戚 40.0%、福祉職員 31.4%、親の会 30.8%

子供との関わり方(複数回答)：完全主義型 63.7%、尽くし型 61.2%、かじ取り型 58.5%、気遣い型 40.6%、控えめ型 30.5%

子供との関わり方：同じ 87.6%、違う 12.4%

満足度(不満度)：満足(1以下) 35.7%、普通 33.8%、不満(1.5~) 30.5%

活動量変化：減った(1以下) 29.9%、変化なし 24.4%、増えた(1.5~) 45.7%

ストレス尺度：弱い 58.8%、普通 23.1%、やや高い 10.8%、高い 7.4%

レジリエンス尺度：平均 50.3 (SD20.0)

パニックになる等の行動をした人：~2・3ヶ月 29.3%、~1年 20.9%、最近 11.4%

障害のある子供の人数：1人 95%、2人 4.6%、3人 0.3%

子供の年代：10代、20代、30代が中心

子供の性別：男性 66.5%、女性 33.5%

障害種別・程度：知的 97.5%(最重度 9.9%、重度 48.7%、中度 27.3%、軽度 14.1%)

障害種別：てんかんあり 29.0%、精神 20.3%、身体 28.8%

自閉症：あり 35.7%(うち自閉症 93.1%、

広汎性発達障害 23.3%)

現在同居状況：別居 16.8%（うち GH・CH28.6%、入所施設 60.7%）

震災前同居状況：別居 13.3%（うち GH・CH25.0%、入所 65.9%）

子供の状況変化：地震を恐がる 45.6%、親と一緒にいたがる 43.2%、睡眠の問題が生じた 18.2%、落ち着きがなくなった 17.9%

子供の状態：奇声 20.9%、睡眠障害 15.9%、多動 15.0%、自傷・他傷 13.5%

子供とのコミュニケーション：言葉 48.8%、カタコト 29.7%、全くなし 16.6%、独り言 4.9%

⑤結果（クロス集計）

a. レジリエンスが弱くストレスが高い人の特徴

\*図中の Q13 とはレジリエンスを尋ねた項目のことである。得点が高い方が回復力が高いとされる。

○同居人数が減った

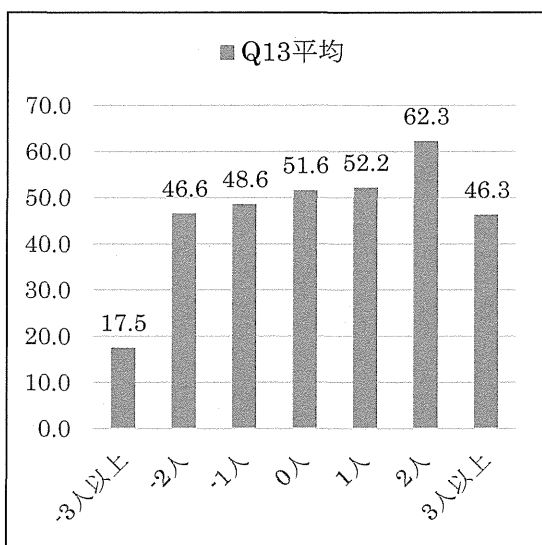


Fig.1 同居人数の増減とレジリエンス平均得点

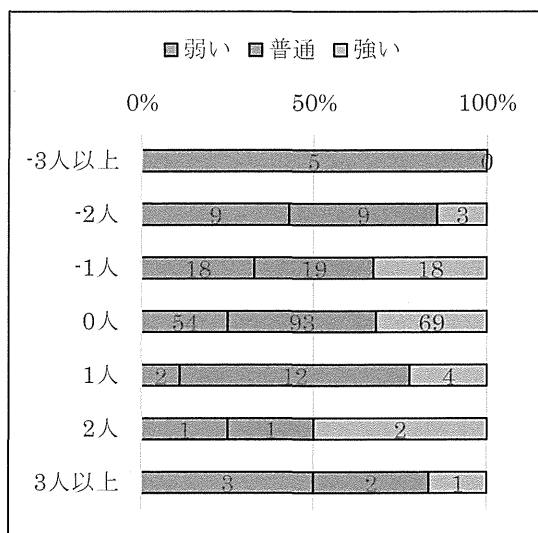


Fig.2 同居人数の増減とレジリエンスレベル

\*レジリエンス得点が、家族が減った場合に低く、得点を3レベル（強い・ふつう・弱い）に分けた場合に「弱い」に該当する者が多い。

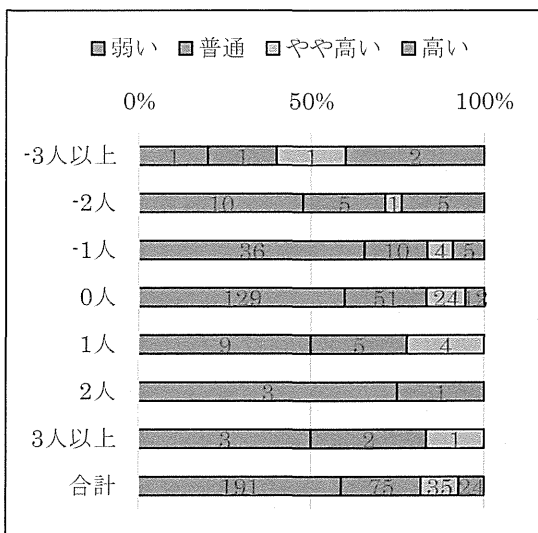


Fig.3 同居人数の増減とストレスレベル

\*ストレス尺度の得点は、家族の数が減る程に「高い」の割合が多くなっている。

○震災前の住まいが全壊した

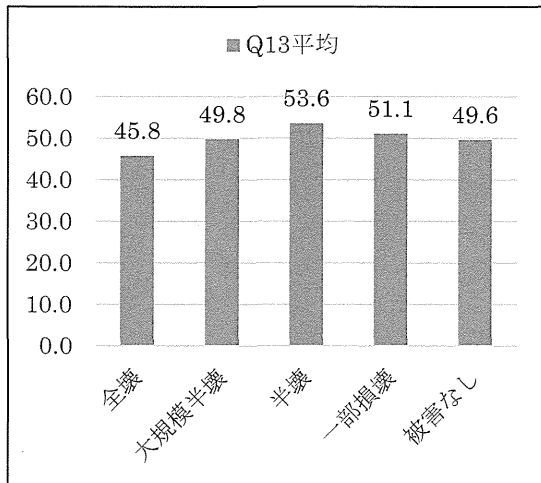


Fig.4 住まいの被災状況とレジリエンス平均得点

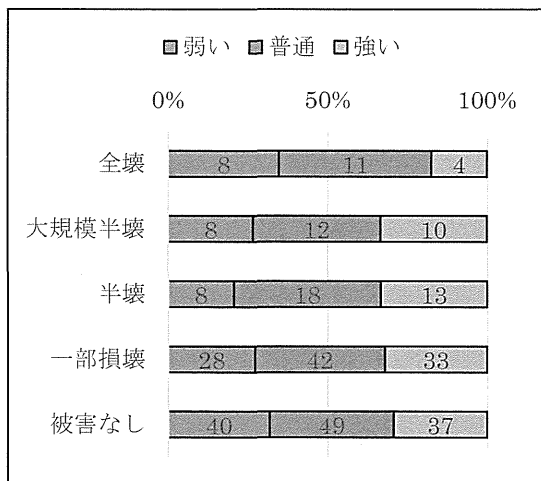


Fig.5 住まいの被災状況とレジリエンスレベル

\*レジリエンス得点が、住まいの被害が大きい場合に低く、弱い人の割合が多くなっている。

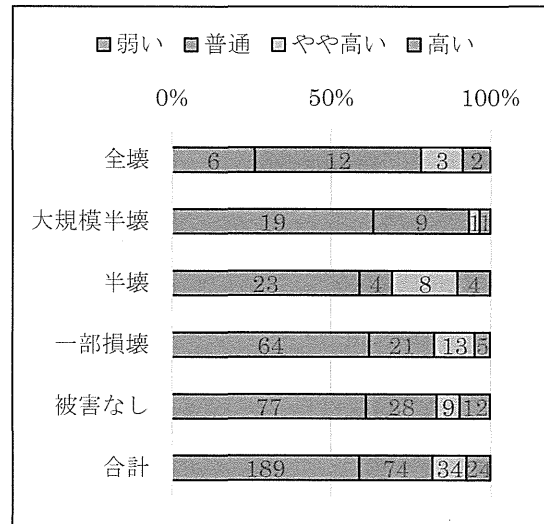


Fig.6 住まいの被災状況とストレスレベル

\*ストレス尺度については、全壊の場合に「弱い」が少なくなっている。「高い」の割合についてはばらつきがある。

○避難を経験した

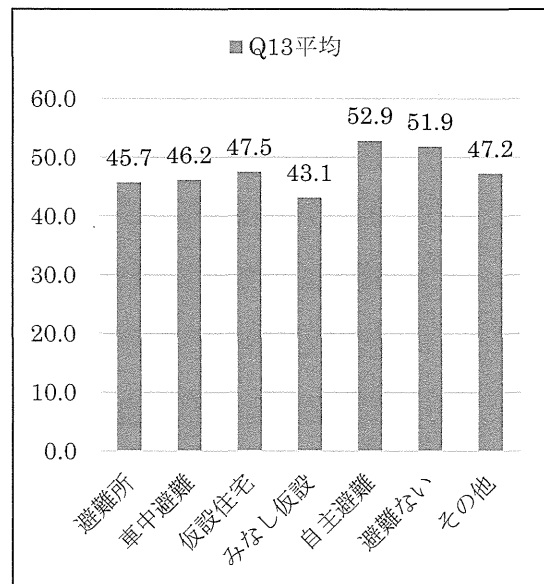


Fig.7 避難経験とレジリエンス平均得点

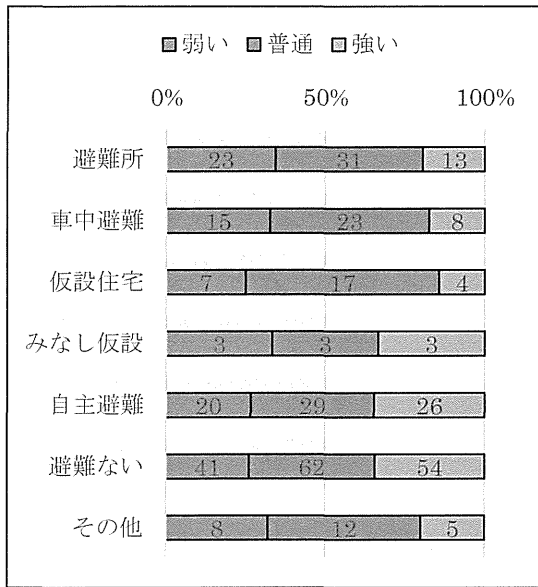


Fig.8 避難経験とレジリエンスレベル

\*レジリエンス得点は、避難を経験した群（避難所・車中避難）において、避難しない群よりも平均点が低くなっている。

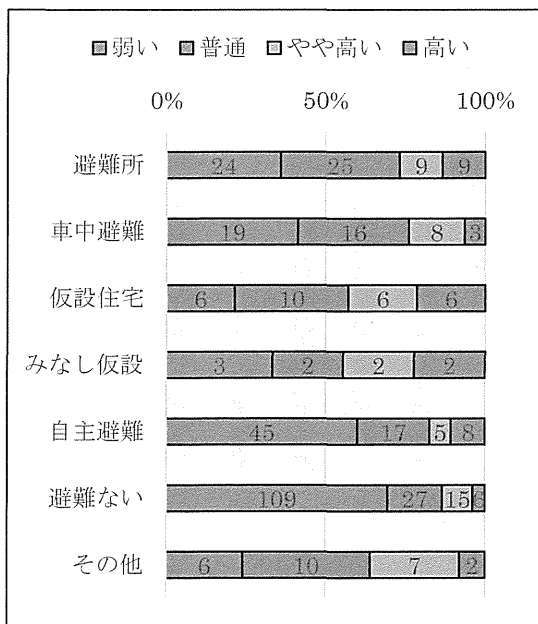


Fig.9 避難経験とストレスレベル

\*ストレス尺度の得点は、避難を経験した群の方がしない群よりも高い。

○転居回数が多い

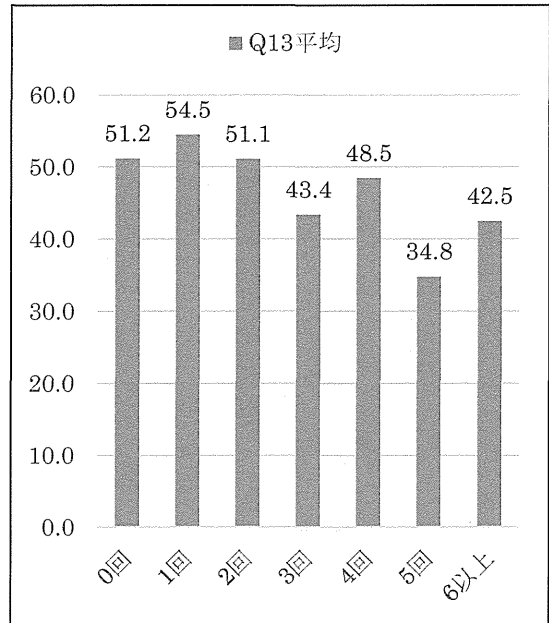


Fig.10 転居回数とレジリエンス平均得点

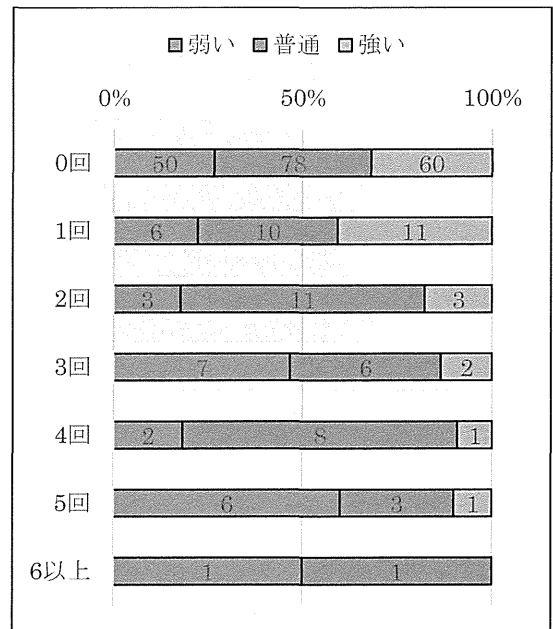


Fig.11 転居回数とレジリエンスレベル

\*レジリエンス尺度は、転居の数が多くなると低くなる傾向がみられる。

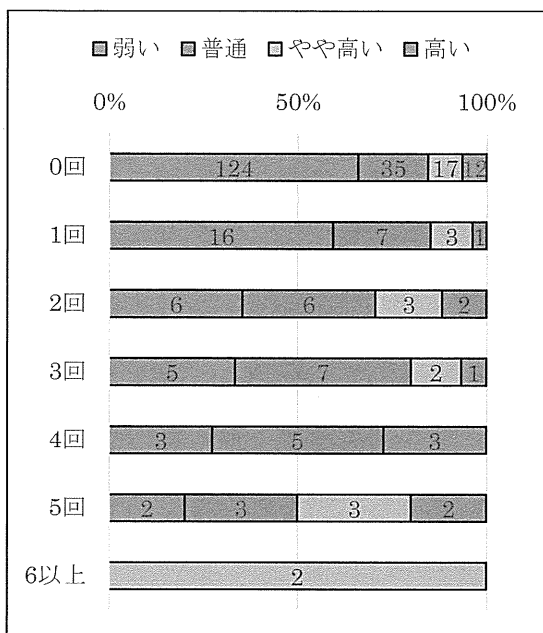


Fig.12 転居回数とストレスレベル

\*転居の数が多くなるほど、ストレスが高くなる傾向がある。

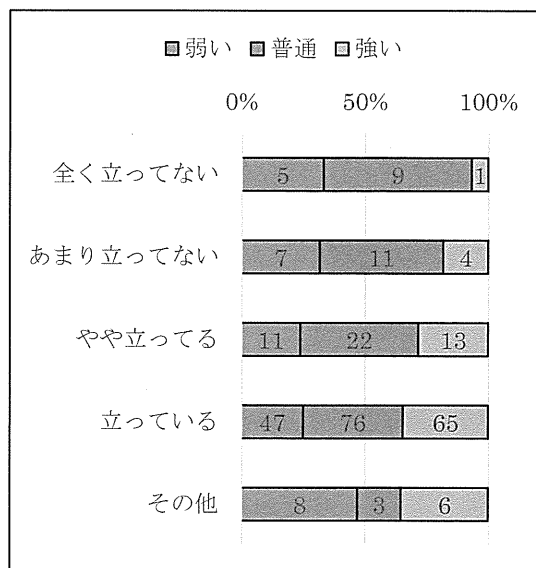


Fig14 生活の目途とレジリエンスレベル

\*レジリエンス得点は、めどが立っていないほど低くなっている。

○現在の住居でのめどが立っていない

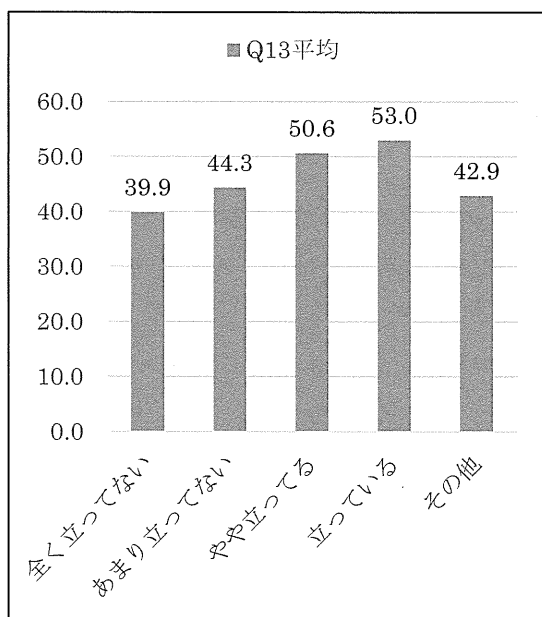


Fig.13 生活の目途とレジリエンス平均得点

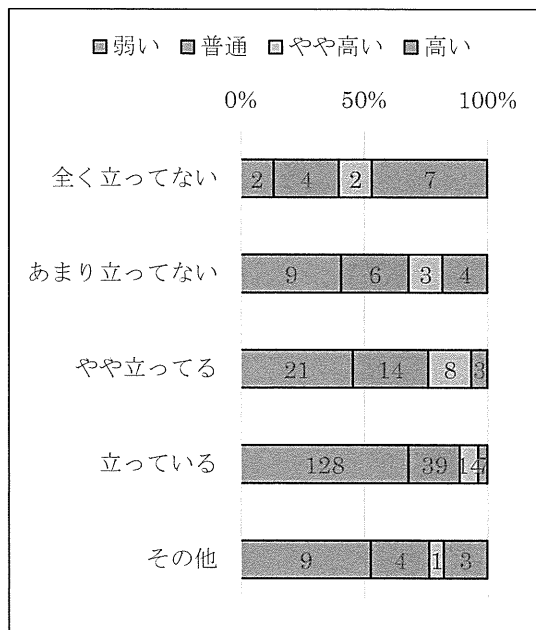


Fig15 生活の目途とストレスレベル

\*ストレスは、めどが立っていないほど高くなっている。

○震災前において相談相手がいない

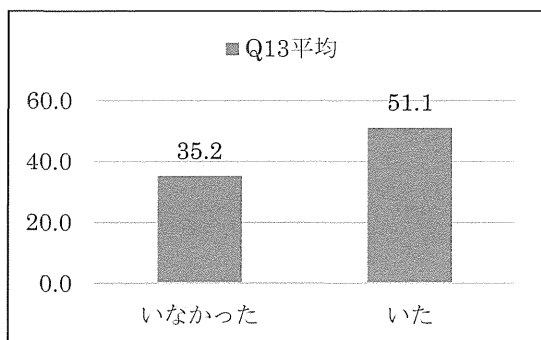


Fig.16 震災前の相談相手の有無とレジリエンス平均得点

\*ストレスが高い人の割合は、いなかった場合の方が多い。

○震災後において相談相手がいない

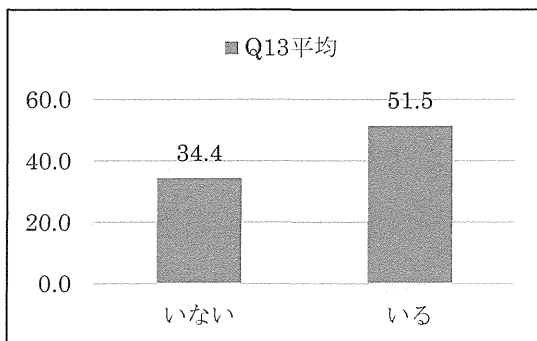


Fig.19 震災後の相談相手の有無とレジリエンス平均得点

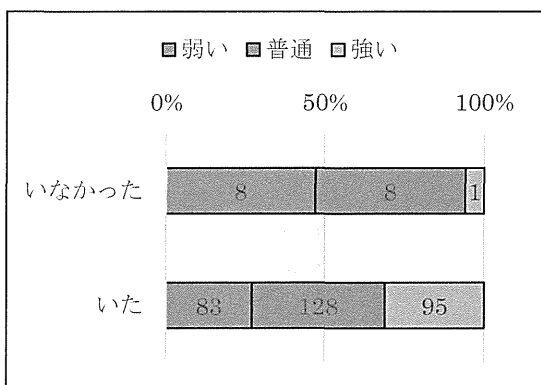


Fig.17 震災前の相談相手の有無とレジリエンスレベル

\*レジリエンス得点は、いなかった方が低くなっている。

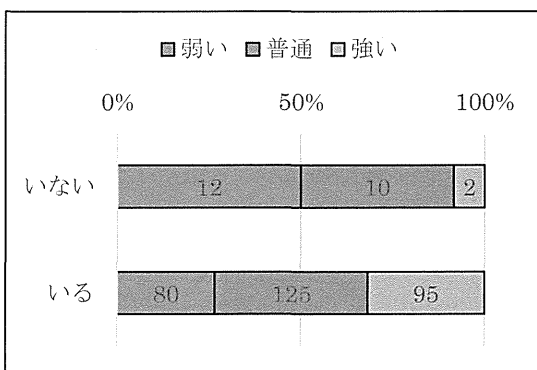


Fig.20 震災後の相談相手の有無とレジリエンスレベル

\*レジリエンス得点は、いない場合の方が低くなっている。

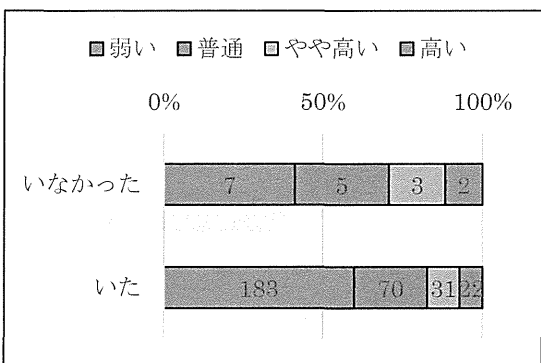


Fig.18 震災前の相談相手の有無とストレスレベル

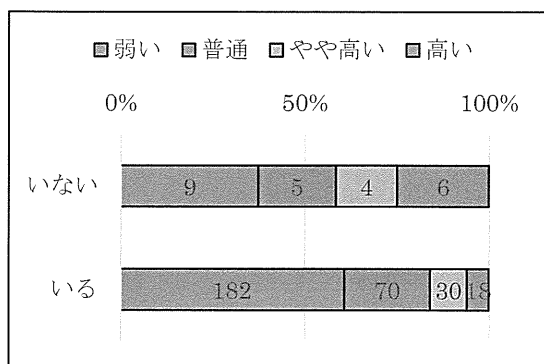


Fig.21 震災後の相談相手の有無とストレスレベル

\*ストレスが高い人の割合は、いない場合の方が多くなっている。

○障害のある子どもとのかかわり方が‘控えめ型’である

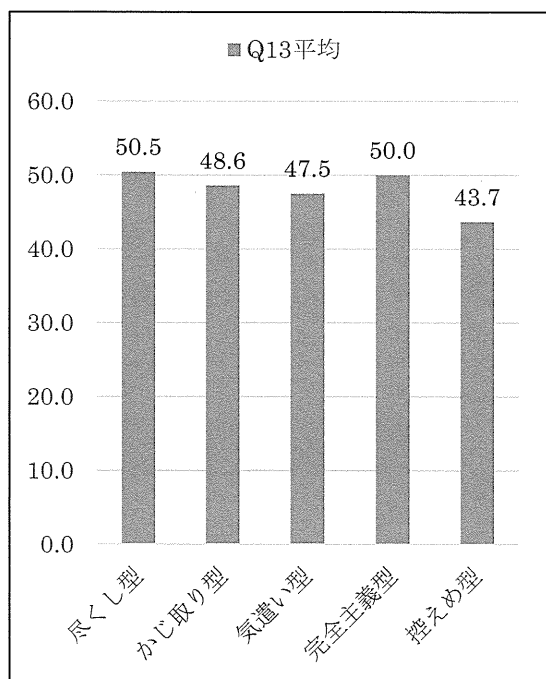


Fig.22 子どもとの関わり方のタイプとレジリエンス平均得点

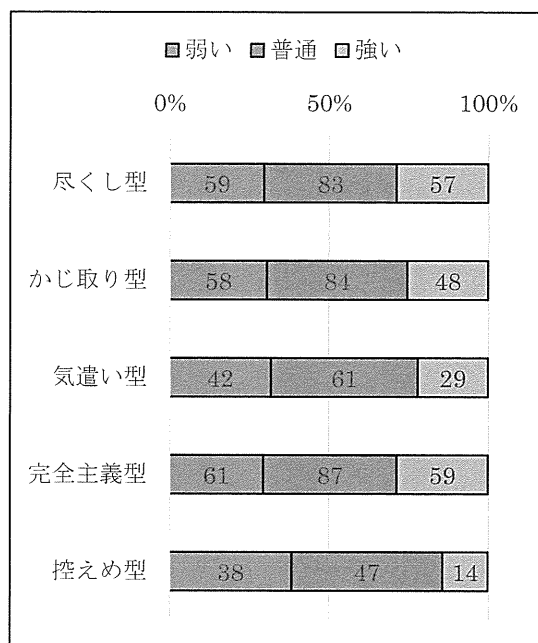


Fig.23 子どもとの関わり方のタイプとレジリエンスレベル

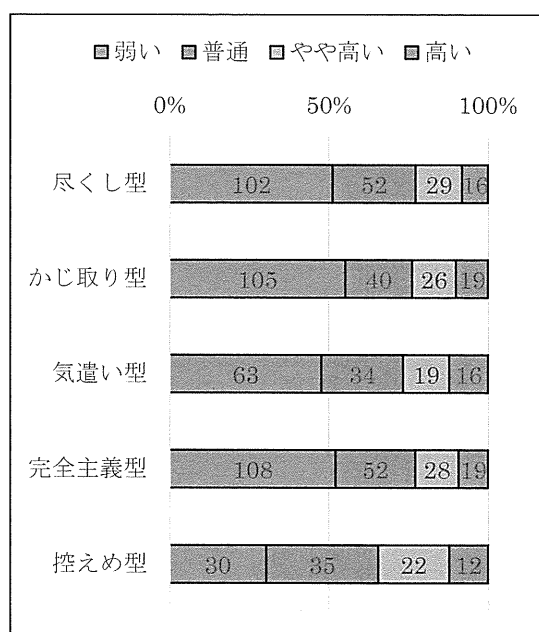


Fig.24 子どもとの関わり方のタイプとストレスレベル

\*レジリエンスが低く、ストレスが高い人の割合が多いのは、「控えめ型」である。



○知的障害が最重度である

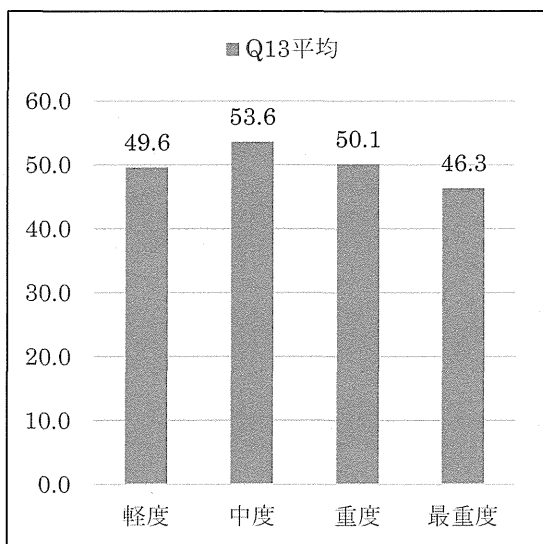


Fig.25 知的障害の程度とレジリエンス平均得点

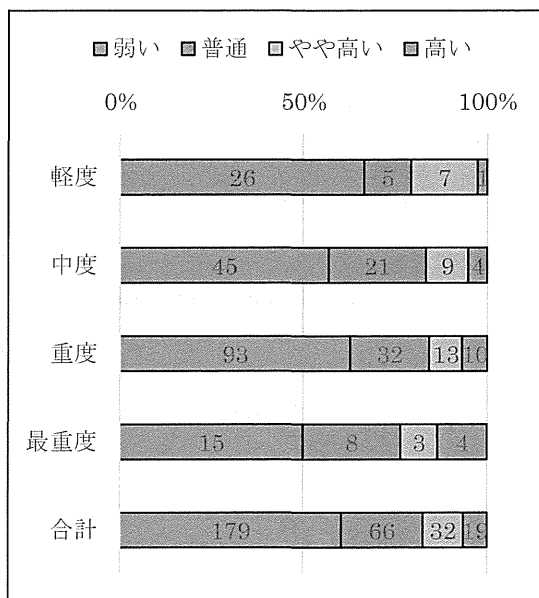


Fig.27 知的障害の程度とストレスレベル

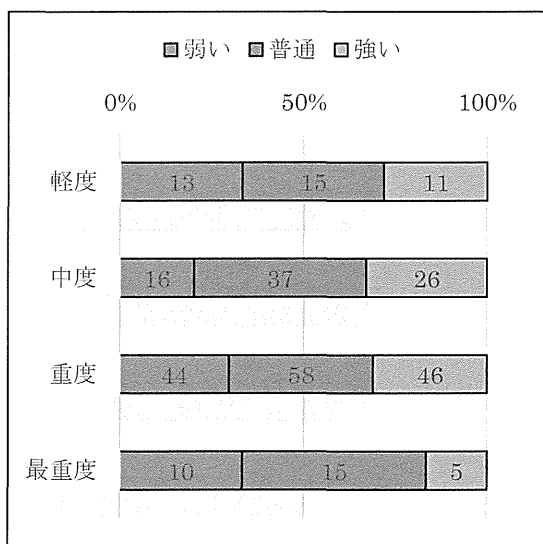


Fig.26 知的障害の程度とレジリエンスレベル

\*知的障害が最重度の場合に、レジリエンス得点が低くなっている。

\*ストレスが高い人の割合は、最重度が一番多くなっている。

○震災直後から2・3カ月の間にパニックになる等の行動をする人が家族にいた

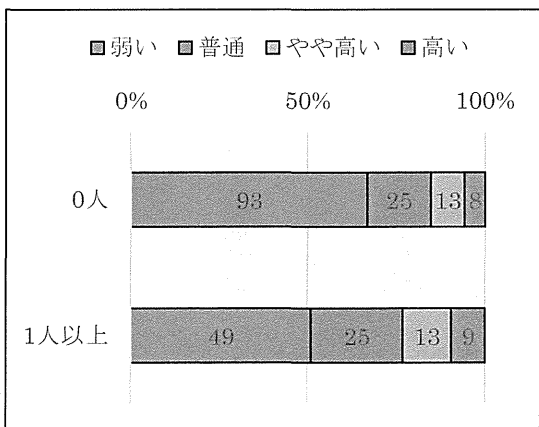


Fig.28 パニック等の発生とストレスレベル

\*発災後～2・3ヵ月以内に、パニックになる等の行動をした人が1人以上いた場合、ストレスが弱い人の割合が低い。

## b. サービス利用量と特徴

震災後に支援の質が変わる層の特徴を抽出したところ、「障害児者の年齢が10代未満・10代」「身体障害が最重度」「自閉症・広汎性発達障害」の場合に、サービス利用料が増える傾向が認められた。

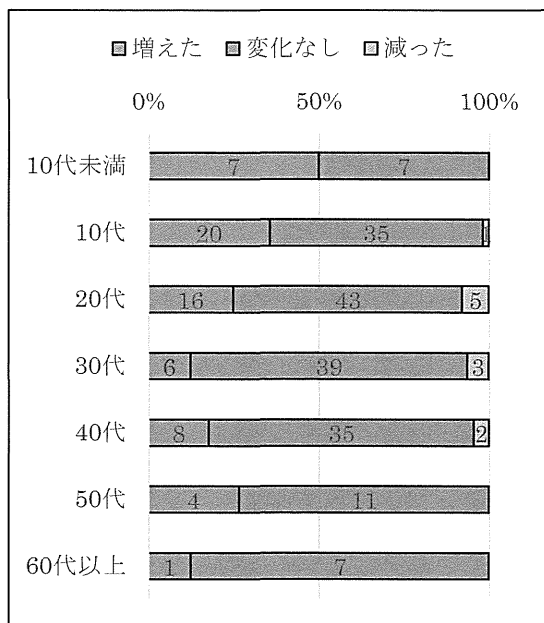


Fig.29 子どもの年代とサービス供給量の変化

\*子どもの年齢によるサービス利用料の変化についてみると、10代と10代未満が増えた人の割合が多い。

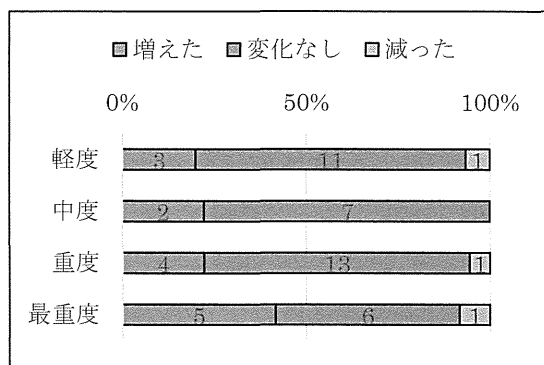


Fig.30 障害程度とサービス供給量の変

化

\*身体障害が最重度の場合に、サービス利用料が増えている。

\*知的障害の場合、利用料が増えた人の割合は障害程度とはあまり関係がない。

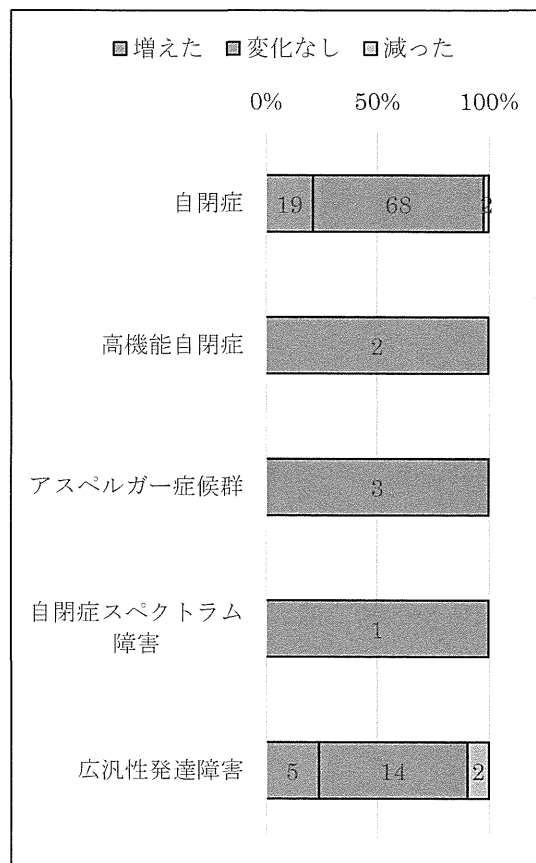


Fig.31 発達障害とサービス供給量の変化

\*自閉症と広汎性発達障害の場合に、利用料が増えている。

## c. 住居でのめどが立っていないのにストレスが低い人(11名)の特徴

### ○子どもとの接し方

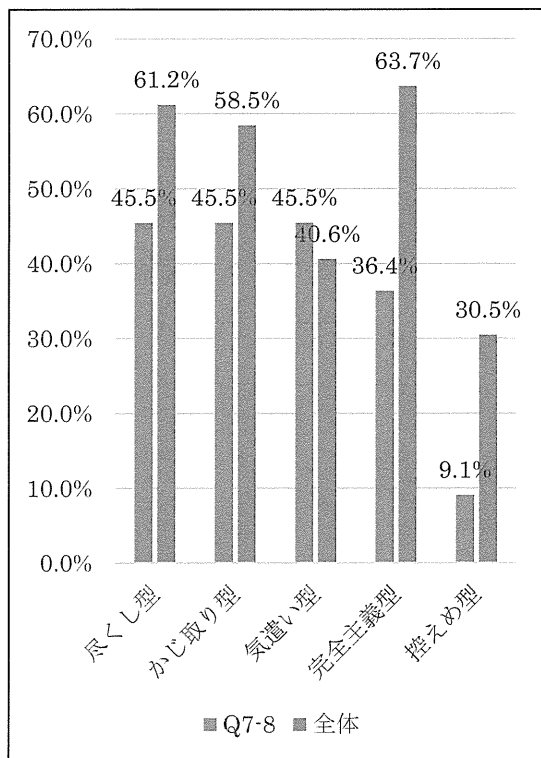


Fig.32 子どもとの接し方の比較

\*全体傾向と比較した際、住居でのめどが立っていないのにストレスが低い人(Q7-8)は、完全主義型、および控えめ型が顕著に少なくなっている。自分にあまり厳しくなく、人の目を気にしすぎないタイプであることが考えられる。

○活動量

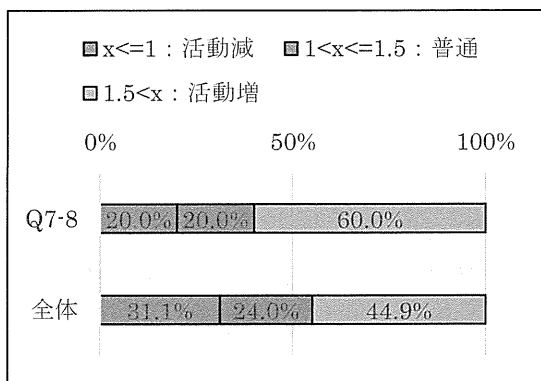


Fig.33 活動量の比較

\*住居でのめどが立っていないのにストレスが低い人(Q7-8)では、活動が増えた方が60.0%となっており、全体傾向(44.9%)と比較してもかなり多くなっている。

d. 相談相手がいるのに、ストレスが高い人(18名)の特徴

○子どもとの接し方

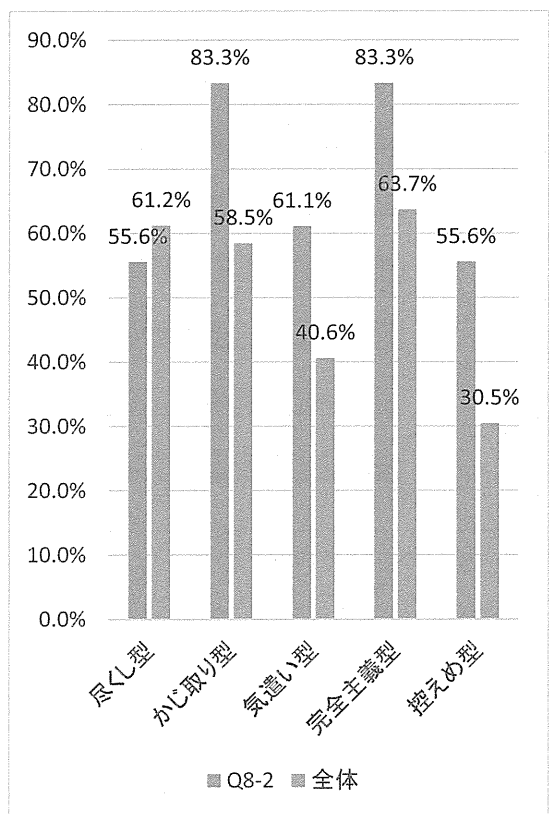


Fig.34 子どもとの接し方の比較

\*全体傾向と比較したとき、相談相手がいるのにストレスが高い人(Q8-2)では、かじ取り型、気遣い型、完全主義型、控えめ型が多く、尽くし型のみが全体傾向とほぼ同等であった。子どもとの接し方においては、当てはまる項目が多いと負荷が高い(機能不全度が高い)ことを意味するため、よりストレスが高くなって

いるものと考えられる。

### ○子どもの状況の変化

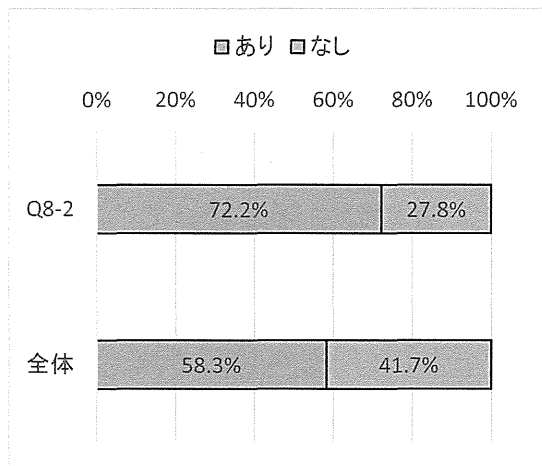


Fig.35 子どもの状況悪化の比較

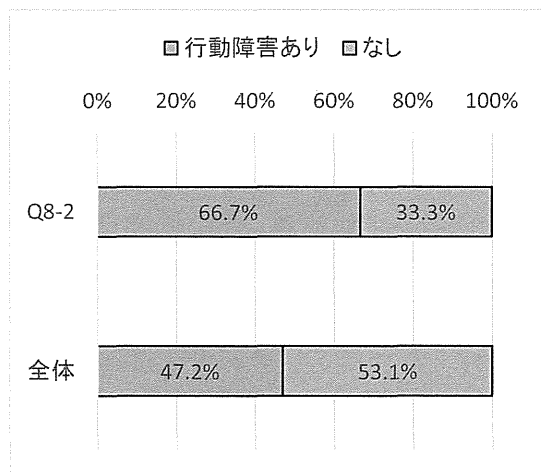


Fig.36 子どもの現在の行動障害の比較

\* 談相手がいるのにストレスが高い人 (Q8-2) では、子どもの状態悪化ありが 72.2%となっており、全体傾向 (58.3%) と比較して多くなっている。また、現在の行動障害も「あり」が多くなっている。

### ○震災前との活動量変化

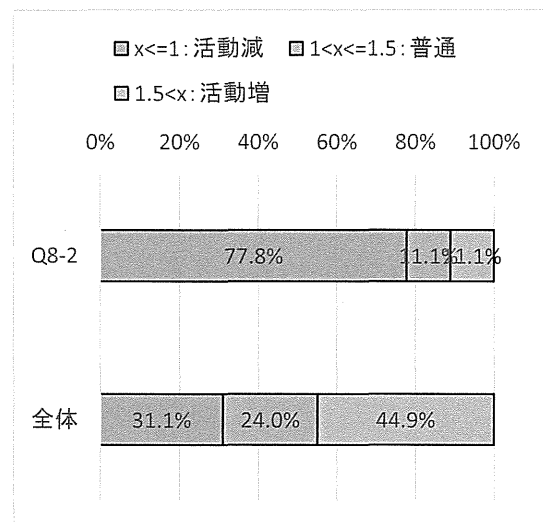


Fig.37 活動量の比較

\*活動減が 77.8%となっており、全体傾向 (31.1%) と比較して圧倒的に活動量が減少している方が多くなっている。

子どもの行動障害があり、それに巻き込まれて親子の適切な距離を取れなくなっている状況があることが分かる。

このような閉塞状況は、サービスの利用等により早期に改善することが必要である。

## 2. 生活再建支援と当事者活動

### (1) 被災時および生活再建過程において

今回の調査においては、沿岸部に居住していた人が多く、元の住居は一戸建てだった人が多かった。そのため、一戸建てから仮設住宅へという生活変化は、住まいだけでなく家庭内での人との距離の取り方や近隣との距離の取り方についての変化も含まれ、ストレスが増大していることが伺えた。

このように、被災した障害児者の親の状態を、信頼性の高いストレス尺度及び